

クメール黒褐釉陶器の調査

ーヴィール・スヴァイ窯跡の発掘ー

1 調査に至る経緯

クメール陶器研究は内戦終了後、タニ窯跡の発見により、急速に発展した。奈良文化財研究所は1999年から2001年にかけて、灰釉陶器窯跡の一つであるタニ（Tani）窯跡において、2003年から2007年にかけては、ソサイ（Sar Sei）窯跡の発掘調査をおこない、それぞれ報告書を刊行している。しかし、黒褐釉陶器の生産窯跡はカンボジア国内からは長らく発見されなかったため、当時アンコール王朝の領土内であった現在のタイ東北部に位置するブリラム（Bhirum）窯跡などで黒褐釉陶器を生産し、王道を利用しアンコールまで運搬されていたと考えられていた。

ところが、2008年頃、M.ヘンドリクソンによりアンコールからプレア・カーン・コンボン・スヴァイへ続く王道沿いに黒褐釉陶器窯跡の存在があらわにされた。奈文研でも独自に踏査をおこない、新たにヴィール・スヴァイ（Veal Svay）窯跡を王道沿いに発見し、2013年2月より調査を開始した。調査にあたっては、2012年度から2013年度にかけて井上国際協力基金より助成を受けている。

2 窯跡の立地

ヴィール・スヴァイ窯跡は、アンコールからベン・メリアアを通して、プレア・カーン・コンボン・スヴァイへと続く、王道沿いに位置する。13° 26' 2.50" N, 104° 22' 9.20" Eにあり、クーレン丘陵の南東に立地している。ヴィール・

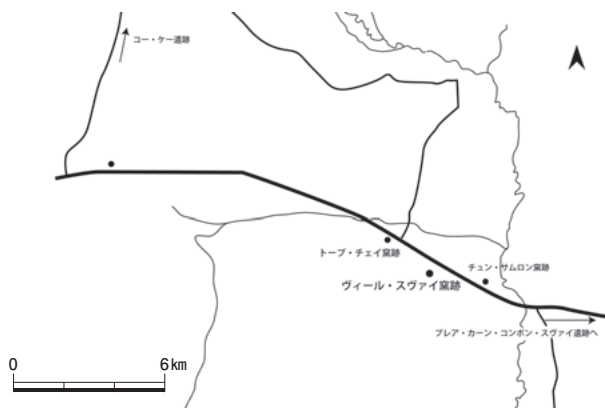


図 I-17 ヴィール・スヴァイ窯跡位置図

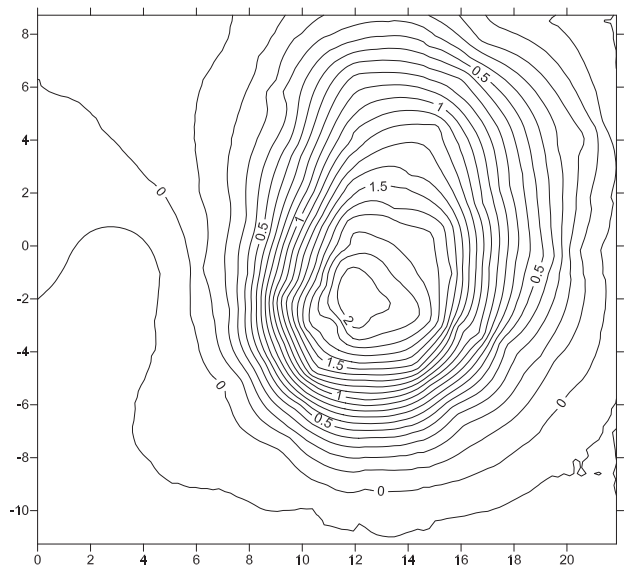


図 I-18 1号窯跡測量図

スヴァイ窯跡の西北西約2.5kmにはトープ・チェイ（Toap Chey）窯跡が存在し、APSARA（アンコール地域遺跡保護整備局）とシンガポール大学の合同調査により発掘調査が2012年末におこなわれた。また、ヴィール・スヴァイ窯跡の東2.4kmには、チュン・サムロン（Chung Samraong）窯跡が発見され、APSARAとスミソニアン機構による合同調査が2013年におこなわれた。王道沿いの極めて狭い範囲に窯跡群が点在していることとなり、当地域が黒褐釉陶器の一大産地であったことが推測される。

3 発掘調査の概要

ヴィール・スヴァイ窯跡には2基のマウンドが存在する。このうち、西側に位置するマウンドを1号窯、1号窯より一回り小さな東側のマウンドを2号窯と設定した。

第1次調査は2013年2月6日から11日に1号窯の測量と、窯跡周辺地形図作成をおこなった。第2次調査は2013年6月24日から29日に2号窯の測量と1号窯に3.5 m × 6 mのトレンチを設定し、焼成部付近の発掘調査をおこなった。第3次調査は2013年12月23日から31日にかけてマウンド周辺での発掘とマウンド構造を確認するための断ち割り調査をおこなった。

4 検出遺構

全体構造 測量調査の結果、1号窯は長楕円形を呈しており、南南西に煙道部、北北東に焚口をもつ地上式の窯体であることが判明した。煙道部は削平されているが、全体に良好な残存状況であった。

焼成部 東西に1枚ずつ残存高約20cmの窯壁を検出した。床面は1枚のみ確認したが、部分的に硬化する程度の硬さで、さほど操業期間が長くない可能性が想定され

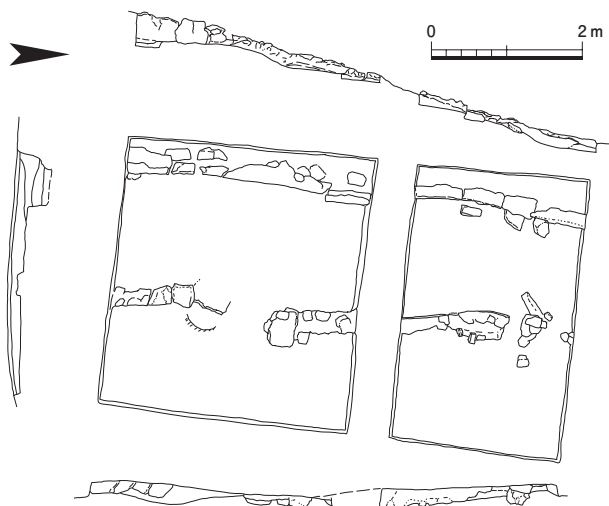


図 I-19 1号窯トレンチ平面図 1:20

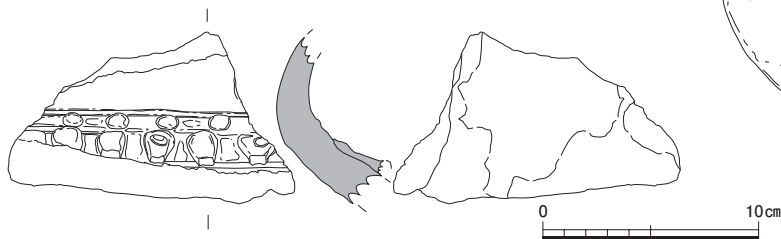


図 I-20 1号窯出土黒褐釉陶器貼付文壺片

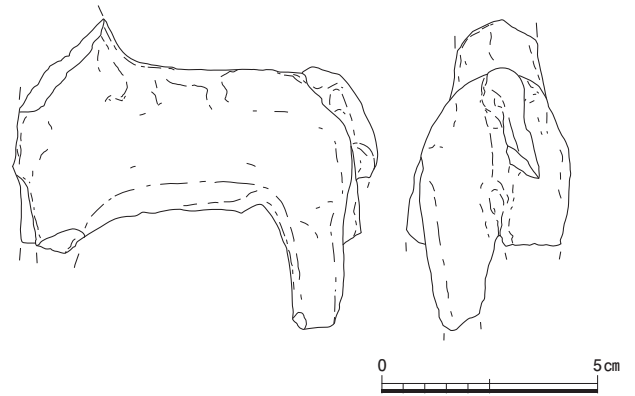


図 I-21 1号窯出土動物形製品

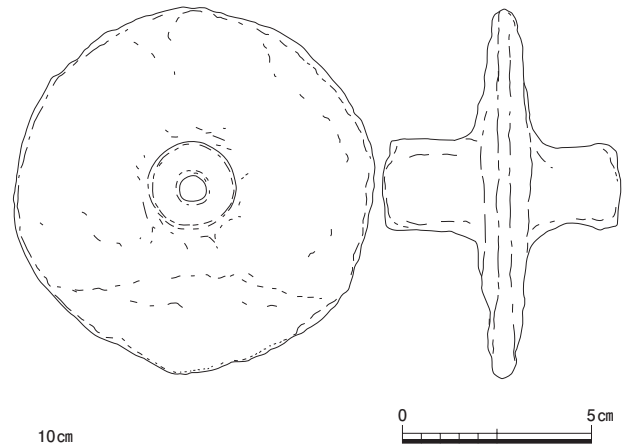


図 I-22 1号窯出土紡錘車形製品

る。焼成部の最大幅は約1.8mをはかり、窯壁表面には築盛時の手指痕や草葉圧痕が確認された。

マウンド構造 窯体にかからない位置においてマウンドの断面観察をおこなった。その結果、1号窯は焼土やブロックを積み上げた人工のマウンド上に形成されたことが確認された。

5 出土遺物

表面採集資料と出土資料から、ヴィール・スヴァイ窯跡で確認された遺物は大きく2種類に分類できる。出土遺物の大半は大型黒褐釉壺甕類であり、小型黒褐釉特殊品は少量見受けられる。なお現在までのところ本窯跡からは瓦の出土はみられない。

大型壺甕類 大型製品はそのほとんどが壺甕類であり、典型的なクメール黒褐釉陶器壺甕類の形状を呈するものが多い。特筆されるのが、黒褐釉貼付文壺片である。円形と水滴形の貼付文を肩部に巡らせるもので、出土事例が非常に少なく貴重である(図I-20)。

小型遺物類 小型遺物としては、動物形製品がまずあげられる。図I-21は牛を象ったとみられるが、頭部と脚部の一部を欠失している。先行研究において、クメール黒褐釉陶器では動物形容器を生産していたことが知ら

れていたが、実際に窯跡から出土した当遺物は特筆に値する。そのほかに紡錘車状製品が出土した(図I-22)。当窯跡だけでなく、近隣のチュン・サムロン窯跡からも同様の紡錘車状製品が出土しており、当地域で共通して生産していたものと推定される。

6 まとめ

当窯跡調査はアンコール地域における黒褐釉陶器生産窯跡の先駆けとなる調査の1つである。3次にわたる調査からヴィール・スヴァイ窯跡は大型壺甕類と動物意匠などの小型特殊製品の生産に特化していた傾向が判明した。また、これまでの調査ではクメール灰釉陶器窯跡は瓦陶兼業窯であったことが判明しているが、ヴィール・スヴァイ窯跡や周辺の黒褐釉窯跡からは瓦を生産していた痕跡が見受けられない。今後、黒褐釉の陶器生産と瓦生産についての関係性について留意しながら、引き続き当窯跡の調査をおこなう予定である。(佐藤由似)

参考文献

- 奈文研『タニ窯跡群A6号窯発掘調査報告』2005。
奈文研『カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究』2008。
Hendrickson, M. 2008 New Evidence of Brown Glaze Stoneware Kilns along the East Road from Angkor. *INDO-PACIFIC PREHISTORY ASSOCIATION BULLETIN* 28.